学体連会報

発行日　昭和61年7月20日
東京都渋谷区代々木神園町3番1号
国立オリンピック記念青少年総合センター内
財団法人　日本学校体育研究連合会
発行者　会長　大石　三四郎

遍　　歴

会　長
特殊法人 日本体育・学校健康センター理事
学校法人 佐藤栄学園　短期大学創設準備室室長　大　石　三四郎

現在、私は埼玉県大宮市より北方、加須（カゾ）市花崎に栄短期大学の創設の仕事をしている。この大学は情報処理学科（工業系）と国語学科、英語学科の三学科である。昭和63年の開設を目ざしているのであるが、この大学の特色をどのようにして出すかと工夫を凝らしている。

その主な点をあげてみると要はトータルとして、三学科相互乗り入れのかたちを取って、それぞれの独立性を維持するとともに、情報処理の最先端の手法を日本語・英語に投入して、国際文化の進展に役立てたいと願っているのである。

と、書くと、何もコト改めて言うことはないではないか、と反論される方もおられることであろう。ところが、いざ、この主旨を実現するために、教育課程を作成する段になると、いろいろと問題が出てくるのである。

まず、国語学科と英語学科の学生に情報処理２単位を必修とするところまでは問題はない。しかし、数学を教養科目として必修にすると言うと、俄然、国語、英語の教授から異論が出た。元来、文学を志すものは数学がキライであるから、文学を専攻するもので、数学を必修とするとしたら、学生がアレルギーを起こすのであると論陣をはる。学生どころか、教授そのものがアレルギーを起こして、私に喰ってかかってきた。

そこで、私は過去において、体育学部において、統計学を講じた経験を述べ、数学のキライな体育の学生が、マガリナリにも、統計を勉強し、今日の体育学科を築いてきた経過を説明して、漸く、納得してもらったものである。

元来、文学者が数学がキライなのではなく、今日までの数学の教育の仕方が文学者むきになっていなかったのではないだろうか。考えてみれば、日本語とか、英語ぐらい数に関係のあるものはない。例えば、この原稿にしたところで、400字詰原稿用紙4枚以内という指示があるのである。日本語にしても英語にしても、一つの情報伝達の手段である。したがって、その内容と字数との関係が問題となるのである。最も簡単な例としては、電報、片仮名15字以内に相手に自分のいうことを十分にして、必要なだけを伝達しなければならないのである。今日まで、簡単な15字の電文の中に名文と称せられるものが数多く残っているのである。

また、体育やスポーツにしても、その勝敗を表すのに数字を用いていることはご存知の通りである。

したがって、私は、この設立する大学の主旨を更に進めて、情報処理、国語、英語の三本柱とともに、人間として、知的情報伝達とともに身体的情報伝達の手段をも忘れないでほしいと、学科主任会議において伝えたのである。そして、更に人間トータルとしての情報伝達の手段として、人間としての格、すなわち、人格の養成にも意を用いてもらいたいと、お願した次第であった。

この栄短期大学は将来四年制の大学として発展することであろうが、その背後には、四年制の体育専攻コースをも含めようという意図が十分に認められるのである。

私は小学校、中学・高等師範、大学と経て、今日まで、体育教師として、また、教育学や統計学の担任として、また、副学長として、研究・医療を担当

し、更に施設担当までやって、この四月までは、国立特殊教育総合研究所の所長として、障害児教育にまで関係してきた。ここに、振り返ると、多くの遍歴ではある。それに兵隊として死地にも飛びこんできたことを思うと、この多くの遍歴を基盤として、今日また、一つの大学の設立に縁をもつことのできた幸運を、マザマザと全身に感じているところである。

私は更に、この連合会のエネルギーをも頂いて、大いに、日本の教育のため努力したいと願っている。

学校体育で今何が必要か

兵庫教育大学教授　辻　野　　昭

学校を卒業してもスポーツを日常生活に享受していけるゆとりはこれまで一部の人々を除いてみられなかった。しかし、自由時間の増大と所得の安定は人々の生活態度を「仕事中心」から「仕事もレジャーも大切である」へと変化させている。また脱工業化をめざす未来社会では人々の関心を生活の量的豊かさから質的豊かさに向けさせ、人々の文化的欲求を拡大させ、スポーツは生活に意味深い経験をもたらす文化的活動として位置づけられようとしている。

他方、豊かな物質文明は生活の合理化と潤沢な栄養を生み出したが、人々を運動不足と栄養過多に陥らせ、からだの「おかしさ」や成人病の出現をもたらしている。

このような可能性と必然性が交錯する中でスポーツに対する人々の要求は著しく増大しているが、これらの要求に積極的に対応していくことが、いま学校体育の重要な課題になりつつあるといえる。

主体性の育成

これはスポーツ施設を増設したり、すでにある公共施設を開放したりする施策だけでなく、生涯にわたってスポーツを享受していくことのできる主体的な人間を学校においてどのように育成するかということをさしている。つまり、自ら学ぶ力としての「自己教育力」の育成が学校体育において求められているのである。

体育に限らず、これまでの学校における教科の学習はどちらかというと強制的な性格をもち、将来の生活に役立つ準備として組みたてられてきた。児童・生徒は学ぶことの意味や価値を学習そのものの過程において得るのではなく、結果としての成績によって知らされてきた。運動の学習も運動そのものを行うことの喜びや楽しさによって動機づけられたものではなく、運動を行った結果としての教育的効果を中心に組織されてきた。そこでは、運動のもつ「欲求充足の機能」（内在的価値）よりも「必要充足の機能」（外在的価値）が着目されてきたのである。

日本人の平均寿命は延び、まさに人生80年の時代を迎え、やがて余暇時間が人生の3割を占めようとする時、生涯スポーツにつながる学校体育は運動そのものを教育の目的、内容としてとらえ、行う者にとっての意味と価値の学習を基盤として進められる主体的な学習でなければならない。

教科体育の実践

主体的にとり組む力はまず教科の授業時間が中心となって、追求的な学習過程の中で育てられなければならない。「体操」、「スポーツ」、「ダンス」のそれぞれについて運動の本質的な特性をとらえるとともに、それぞれの運動領域に含まれる、技能の習得を中心とする運動の課題を明らかにする必要がある。

次にその課題を解決していくために、教師と児童・生徒が互いに工夫していく追求的な学習過程が体育の授業の核になってくる。

児童・生徒のひとりひとりは「少しでも上手になりたい」、「みんなと一緒にやりたい」という欲求をもっている。これと運動課題が一体となり、たとえば「めあてをつかむ ── ためす ── なおす ── 身につける ── たかめ・たしかめる」といった主体的な追求の過程をたどってこそ、他の運動場面や実際の生活場面にも転移する「生きて働く力」が身につくのではなかろうか。

「できる」と「わかる」の統一

主体性は児童・生徒のなかに認識する力をどのように育てるかに関係する。自分自身の健康・体力の現状を認識し、それに応じて健康・体力づくりのための運動処方の能力を身につけるようなことは勿論重要であるが、さらに運動をわかりやすく意味のあるものにするためには、児童・生徒自身が運動を分析したり、批判したり、評価したりする力量を身につけさせる必要がある。スポーツ科学（スポーツ哲学、スポーツ史、スポーツ社会学、スポーツ心理学、スポーツ生理学、スポーツ医学、スポーツ・バイオメカニクス、スポーツ教育学）の近年における急速な進歩とともに、一方ではこの成果を現場の運動学習にかえして「できる」（実践）と「わかる」（認識）を統一するはたらきが重要になってくる。

実際には科学というものを何かできあいの専門的知識としてとらえるのではなく、児童・生徒が直面するスポーツ事象の現象とその本質の因果関係としておさえておく必要がある。つまり「なぜそうなるのか」という志向ないし認識が重要であり、教材の側からいえば、「なぜ」というかたちで思考させる内実があるかどうかであり、方法の側からいえば、思考させる発問や工夫の余地があるかどうかである。

選択制の充実

これらの主体性を育てる学習は自己の能力を考えて選択した運動種目において実現できる可能性が高い。その意味でも各種のスポーツやダンスのうち、少なくとも1～2種目を自分の能力に応じて選択し、そこでは自分たちで計画をたてて学習できる程度の基本的な能力を身につけさせることが必要である。そのためには、発展系列のない「小まぎれの小単元」制、あるいは「繰り返し単元」制をとるのではなく、発展性をもつ「大単元」制をとることが必要である。その前提として、学年段階からいえば、「基礎になる運動学習の時期」、「多種目からなる運動学習の時期」、「選択制による専門的な運動学習をする時期」のような基本的な区分が必要であるように考えられる。これらは生涯を通してスポーツを楽しみ、人生をより豊かにするために「自分のスポーツ」をもつという点できわめて重要な問題である。選択性の導入にかかわる問題は緊急かつ真剣に検討しなければならない。

部活動の指導

ある調査によれば、学校卒業後のスポーツへのかかわりあいは、「よい先生との出合い」、「楽しい授業経験」、「ある程度徹底的にやった運動部経験」をもつ者ほど強いといわれる。

教師の役割はきわめて大きいが、ここでは教師その人の行為がどうであったかが問われねばならない。児童・生徒の側からいえば、「一緒に運動してくれる教師」、「一人一人をみとめてくれる教師」、「下手でも親切にしてくれる教師」、「一緒に考えてくれる教師」などの具体的な行為が印象に残る授業となり、やがてスポーツとのかかわりあいを強めるものと考えられる。

授業における学習指導の問題についてはすでに触れたのでここでは運動部の問題に目を移したい。

クラブや部活動ではそれぞれの運動種目の技術構造を基にした発展系統を手がかりとして指導されていて、それなりに成果をおさめているが、指導者によっては自己の経験を押しつけているような傾向も少なくないと思われる。部員の中には自分で身につけた技術やその努力の過程について意義あるものと受けとめている者もあれば、そうでない者もいることを忘れてはならない。部員個々の能力、適性を基盤として本人の創意工夫が実現されるように考慮される必要がある。指導者から一方的に指導されるだけでは主体的に取り組む力は高まらないように考えられる。

わが国ではスポーツとのかかわりあいは学校から始まる傾向が強いことを思えば、クラブ、部活動、学校行事についても主体性を育てる点でいま一度見直す時機に来ているのではなかろうか。

研究活動への参加

以上のような教育実践に関する課題は実践者と研究者が協力して早急に解決していかなければならない。教育現場の現実を動かす力は「研究のわかる実践者」と、「実践のわかる研究者」の相互協力によって生れてくるものと思う。

宣伝めいて恐縮であるが、スポーツに関する諸科学が専門化、総合化されつつある一面、その研究成果が教育実践へあまり寄与していない反省にたって、専門科学と教育実践をつなぎ、社会的、文化的現象としてのスポーツを主体的に享受していける人間を育成するために情報を交換しあう学会として、5年前に日本スポーツ教育学会（会長・大石三四郎）が生まれた。筆者も会員の一員である。ここでは、研究者はもとより、学校体育、社会体育などの実践者の研究、あるいは両者による協同研究が盛んに行われている。

本年の第6回大会は、とくに実践的研究に重点をおき、第25回全国学校体育研究大会兵庫大会が行

われる11月20日、21日に引き続き、11月22日に大阪「なにわ会館」で開催されることになった。

学校体育に関する実践的研究と実践者の参加を大いに期待したいものである。

今、子供達に必要なもの

千葉県市原市立光風台小学校教諭　常　泉　公美子

休み時間になると、サッカーボールやドッジボールを手に、外に遊びに行く集団がある。すぐに読書を始める者が数人いる。一方で、何をするともなく教室でぶらぶらと暇をつぶしている集団もある。この3番目の子供達を見て、私はある予感がした。そこで、外に出て遊ぶように話したところ、こんな返事が返ってきたのである。

「汗をかくから、めんどくさいよ。」

「外に出ても、することがない。」

これには唖然とした。二の句が告げなかった。がしかし『やっぱり』という気もした。というのは、帰宅してからも殆ど外では遊ばないという子供達だったからである。それにしても、外で遊ぶ楽しさを知らない子供達が大人になると、いったんどんな世の中になってしまうのか、と考えると背筋が寒くなった。これが、現在の子供の持つひとつの問題点だと思う。

ところで、子供の遊びそのものが変化してきたという。以前の様に、近所の友達とどろんこになって遊んで帰って来る子供はなりをひそめ、テレビの前で、コンピュータゲームのカセットを相手に時間を費す子供が激増したという。

私の教えている子供達も時代の流れに乗り、70％以上の子供がカセットを所有している。そして、毎日1～2時間、多い子で3～4時間はゲームに夢中になる。

次の文章はこのような子供のある日の日記である。『今日は、A君といっしょにファミコンをやりました。A君は3面までいきました。ぼくはA君が終わるまでマンガを読んでいました。番が来たのでやったら4面までいったので勝ちました。』

この中で『A君といっしょに』という部分があるが、“ぼく”とA君は決していっしょに遊んだわけではない。“ぼく”が遊んだ相手は機械であり、カセットの中の人物である。A君とは単に同じ場所にいただけで、心はそれぞれ別の世界にある。しかし子供達はそんなことには気づかずにいる。私は、これが、子供達の持つもうひとつの大きな問題点だと思う。

これらの子供達には、体育を通して、友達といっしょに遊んで汗をかく楽しさを教えたいと思った。

まず、スポーツテスト等の結果を見ると、子供達の運動能力にはかなりの偏りがあることがわかる。敏しょう性、瞬発力は全般的に優れているが、筋力、持久性、柔軟性がかなり劣っている。

これらの結果は運動に対する好みに関係がありそうである。多くの児童は、サッカー、ミニバスケットボール、ドッジボール等の球技は比較的喜んで行い、それ相応の技術も身につけている。しかし、ボール運動ばかりしていたのでは、運動能力が偏るのも当然だと思われる。

総合的な運動能力をつけさせる為には、筋力を鍛えたり、柔軟性を養ったりする運動も必要だと思う。それに加えて、子供達が友達と協力しなければ、どうしても物事がうまく運ばないような場も、常に設定するように心掛けている。

例えば、4月～5月には、サーキットトレーニングコースのようなものを作る。マット5～6枚、平均台2台、跳び箱2台、ボール20本、ボール15個位、フラフープ30本位、等を一度に用意し、グループごとに使い方を考えさせ、それらの運動を連続して行うと、サーキットコースが出来上がるのである。40人足らずで用意するので協力が必要である。同時にそれらを運ぶことによって、日常生活では余り使わない筋肉も使うことになる。さらに、跳ぶ、転がる、ぶら下がる、投げる等の多様な運動を一度に行うことができる。

このように、友達と工夫しながら動く楽しさを知った子供達はやがて、道具がなくても、人間対人間で遊べるようになるだろうと、私は信じている。

小学校体育で今何が必要か

東京都府中市立白糸台小学校教諭　小　泉　　誠

1. 小学校体育科の目標

最近、スポーツのプロ化が進む中で、体育のカリキュラムも変わってきている。今日の学校体育は、生涯体育・生涯スポーツに結びつけようとしている。その土台となる小学校体育に求められるものは、何なのだろうか。

現在の小学校体育の目標は、「適切な運動の経験を通して運動に親しませるとともに、身近な生活における健康・安全について理解させ、健康の増進及び体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」

これは、児童の立場からの運動要求の充足や学習態度の育成を目指し、運動の楽しさを児童の一人一人に味わわせ、児童の自発性を引き出すことである。更に、生涯体育へと発展させることをねらったものである。

2. 小学校体育の現状

この運動の特性にふれる楽しさ・喜びを味わわせようとする小学校体育の実態はどうであろうか。

まず、私には、子供達の遊ぶ場所・遊ぶ内容が限られている様に見受けられる。また、遊びの種類を知らず、遊びを工夫できる子供が少なくなってきていると思う。そして、友達づきあいの下手な子供が増えている。教師は、このような子供達に集団での体育学習を指導するわけである。

また、教師の中にも体育を苦手と考える人も多い。教師が指導内容や運動の段階を把握せずに指導したら、学習する児童はどこまで理解できるだろうか。

この様な中での小学校体育において、何が必要なのか考えていくことにする。

3. 小学校体育に必要なもの

今まで述べてきた事から、次の点が必要だと考える。

(1) 教師の姿勢

まず、目標や指導内容などの教材研究を熱心にすることが必要である。

実技に関しては、専門に学んできた教師や運動が好きな教師以外は、消極的になりがちである。体育専科として教師になった者が少ないわけだから、研究会等に積極的に参加し、知識を増やすことと、市町村や校内において実技研修を増やすことが必要である。実際に教師が示範できることが最良であるが、できない場合の指導方法の研究という方が、小学校においてはすぐに必要だと考える。

また、低・中学年の体育は、特に教師の教材の工夫がしやすいので、場に応じた教材開発をすることも大切である。

(2) 児童への配慮

前述した様に、精神的にもろい、遊びを知らない子供が増えている現在、児童理解を欠くことはできない。学校生活（休み時間・放課後）を通して教師を好きにさせることが一番である。

次に、家庭の実態を把握しておき、子供の日々の様子を正しくつかんでおくこと。各種の実態調査などを参考に、運動への興味関心を調べることもよい手段である。

更に、一つの教材を指導する時に、これを教えたら、この児童はここまでの技能になるという、大まかな見通しを持つことが大切である。

最後に、児童への賞賛である。自分から進んで取り組む児童には、きびしさも必要になるが、まずは、賞賛することによりやる気を引き出すことが大切である。

(3) その他

まず、教師の教材研究の時間の確保が一番である。日々の事務処理に追われ、教材研究に費す時間が不足しているのが現状である。

次に、教材ごとの指導しやすい指導書、副読本を作る必要がある。その地域に合った体育教育を充実させる為にも必要となるだろう。

最後に、体育科における目標の共通理解を今後も深めていくことが大切である。生涯学習体系への移行を主軸とする教育体系を確立するためにも、

何をどのようにすればよいのか。幼・小・中・高・大そして、生涯体育への流れをもう一度考え直すことが必要である。

中学校体育で今何が必要か

東京都豊島区立千早中学校校長　田　中　益　哉

中学校は40年目を迎えたが、いろいろな課題に直面し解決を迫られている。このところ、教育に関する報道の中で、中学校は大きな、そしてショッキングなニュースを提供して来た。

一方、日本は世界の長寿国となり、生涯にわたって、健康で充実した生活を営むことが望まれるようになって来た。

このような状況を認識し、生徒をよく理解し、人間形成という教育の目的達成に向かって、中学校体育はその原点に立ちかえって充実発展の努力をしていく必要がある。

そのためには、従来の体育の授業の、教師主導型や鍛練中心の体育から脱却して、生徒自身が主体的に活動する体育学習へと発展していかなければならない。

本校は、東京都教委指定の健康つくり推進校として2年間研究をして来たが、上述のことをふまえ、「健康つくりの意識づけと実践」という研究主題でささやかながら研究実践して来たことをもとに、中学校体育で今何が必要かを考えてみることとしたい。

1.　質の高い運動の楽しさを知る

生涯にわたって運動を楽しみ、健康で価値ある人生を送ることを考えると、質の高い楽しさを知る必要がある。

そこで、生徒自身が主体的に活動し、より高度なプレーが出来るようになれば運動の楽しさは増す。現在の能力を知り、さらに高めるにはどのような練習をすればよいかを生徒自身が考えることが大切である。

(1)　個人や集団の課題を持つ

生徒が主体的に学習をするためには、ねらいを明確にし、課題をはっきり持つことが大切である。本校ではこのことに重点をおいて実践研究をしている。

集団的スポーツでは、グループの課題を明確にし、それとの関連を考えて個人の課題を持たせ、何をどう学習すればよいかをとらえさせる。教師は、その課題解決のために、生徒に対してどう指導・援助するかを考えるというような授業を進めるようにしている。

個人的スポーツにおいても個人の課題を明確にし、その課題解決法を生徒とともに考え、指導・援助する。

(2)　現在の能力を知り、見通しを持つ

適切な課題を設定するためには、生徒自身の経験や能力の程度を生徒も教師も的確に把握するとともに、その課題はどのように発展していくかという見通しを持つことが大切である。そのためには、「学習計画」を生徒の持つ課題をもとに見直すことが必要になって来る。

(3)　練習の要点を理解する

それぞれの課題を解決するために、よりよい練習法にはどのようなものがあるか、技能の要点は何かを理解させることが大切である。生徒はそれをもとにさらに発展した活動をするようになる。教師は適切な資料を適時に提示することが必要となってくる。

(4)　課題解決を確かしめる

チームや個人の課題がどの程度解決されたかを確かめながら、学習を進めるようにする。現在の能力を発揮してゲームを楽しんだり、確かめをしたりしながら、もっと質の高い技能を身につけ、楽しさを求めるような学習をする。

2.　生涯体育と中学校体育

中学校体育は、生涯にわたって自発的に運動を楽しみ、健康で豊かな生活をするために必要な基礎を作る時代である。そのためには、多くの運動経験を積ませるとともに、自己啓発と自己管理能力を養うことが大切である。本校の「健康つくりの意識づけ」もこのようなことを考えてのものである。

与えられた標題に対して充分な解決をみることは出来なかったが、本校の実践の中から中学校体育のかかえる課題の一端を述べ、責を果たすこととする。

埼玉県の研究組織とその研究内容

埼玉県大宮市立大宮北高等学校教諭
県高体連学校体育研究部委員長　野　本　忠　雄

日本学校体育研究連合会には、学校体育協会として加入している。学校体育協会は、小学校体育連盟、中学校体育連盟、高等学校体育連盟の連合体である。合同の事業としては、年1回新体育講習会を開催している。内容は、その時代、時代に応じた教育、体育、スポーツについての講演会を開き、小・中・高体連の先生方の資質の向上に寄与している。又各体連は、次のような独自の事業を行っている。

小体連は、研究組織ですので、その組織にもとづいて、県下を9支部に分け、各教育事務所の指導を受けながら、希望、推薦により選出された人達が、課題にもとづいて授業研究をして、それを各支部研究大会に発表し、その中の代表者が、県の体育研究協議会に出席して、研究協議がなされている。

中体連は、競技団体ですので、その中に授業研究会を作り、各教育事務所の指導を受けながら、希望推薦により選出された人達が、課題にもとづいて授業研究をして、それを支部研究大会に発表し、その中の代表者が県の体育研究協議会に出席して、研究協議がなされている。

高体連は、競技団体のため、昭和45年に学校体育研究部、定通部、専門部に組織を変え、研究部門は、研究部が主管している。研究テーマを決め、研究員を委嘱し、授業実践をして、体育は2月に1泊2日を使って体育研究協議会を開いている。高体連の歴史とともに歩んでいるので、30余年も続いているのである。保健は、10月に1日使用して研究協議会を開いている。その他、研究部は企画、運営と、必要に応じて調査研究をし、100ページ程度の部報を毎年発刊して、研究内容の充実、向上に寄与している。

地方だより

昭和62年第26回全国学校体育研究大会に向けて

宮城教育大学教授　洞　口　六　夫

昭和62年第26回全国学校体育研究大会が、宮城県で開催されることが全国理事会において決定されてすでに満2年を経過しています。この間、7回にわたる準備会を開催し、漸く、大会要項を決定し、更に、顧問会議などを経て、近く実行委員会が発足することになっています。この第26回大会は、みちのく仙台を中心に開催するということもあって、開催時期も他県に比較して約1ケ月もはやく、10月22日、10月23日の両日と決定して準備を進めてまいりました。全体会は、仙台市で、分科会は、仙台市と名取市の両市にわたって、15会場で実施する運びとなっております。この大会の実現に向けての準備委員及び実行委員は、どの県の全国大会にも劣らない大会になるよう鋭意努力を重ねております。特に、研究主題として、学校体育の創造という大テーマを掲げ研究活動を進めておりますが、この研究テーマは、すでに、昭和60年、61年との2年間にわたって、県大会で研究を継続してきたものであり、来るべき全国大会で総まとめ的研究という方向で進めております。一般に、学校体育の授業研究や研究発表は、ワン・パターン的研究が多く、学校または、個人の独自性、創造性が薄いという傾向を反省し、

第26回研究大会においては、できるだけ、個性的で創造性豊かな授業展開や研究発表にしていきたいものと努力を払っている次第であります。

昭和57年6月23日以来、東北新幹線が開通し、すでに、1億人が利用しているとの報告もありますが、上野・仙台間を僅か2時間足らずで結ぶこの東北新幹線の利用価値はすばらしいものがあります。この東北新幹線の利用によって、他のどの県よりも多数の参加者があるものと期待しております。関西、四国、九州方面や北海道方面から御来県いただく方のためには、仙台空港までの航空便もあり、交通関係については、みちのくとは云え非常に便利になっております。

御承知のように、仙台市は、伊達藩の城下町として繁栄し、昭和20年7月の仙台大空襲によって、焼野原と化したものの、終戦後のめざましい復興によって、現在では70万都市にふくれあがり、更に、隣接する市町をも含めて、政令都市構想の実現に向けて発展している都市となっています。また、分科会場として、隣接している名取市をも予定していますが、この名取市も、仙台市のベット・タウンとして発展しつつある市であります。宮城県全体を、仙台市を中心に眺望したとき、東方には、日本三景の一つとしての松島湾を控え、西方には、鳴子、作並、秋保の温泉郷があり、更に南方には、奥羽山脈の一角として蔵王連峰が連なり、観光地としても、参加者を満足させることができるものと確信しております。来たるべき全国大会には、全国各地より、この宮城県に多数の会員が参加集合されますことを心から期待申し上げる次第であります。

栃木県の活動状況等について

栃木県立岡本養護学校校長
栃木県学校体育研究連合会会長　大　貫　昭　市

本県における小学校、中学校、高等学校の一貫した体育指導と学校体育の振興を図るため「栃木県学校体育研究連合会」が、正式に組織化し発足したのは、昭和45年前後であったと記憶している。したがって、その歴史は他県よりも浅く、また幼稚園や大学をも含めた本格的な組織に至っていない。

発足以来、16年間の経過の中でそれまで見られなかった小・中・高等学校の体育関係者が一堂に会し、一貫した体育指導のあり方を模索しながら、「これからの学校体育はどうあるべきか」について研究を重ね、相互理解と資質の向上に努め、本県学校体育振興に極めて多大の成果を収め得たことは、誠によろこばしい限りである。

本研究連合会の組織が年々充実し活発な活動が行われるまでには苦難の道が多々あったが、今日のように立派に成長したのは、県教育委員会を始め関係者の絶大なるご尽力があったことを忘れてはならない。ここに改めて感謝の意を表したい。

1. 組　織

本研究連合会は、県小教研体育部会、県中・高教研保健体育部会等が加盟し、組織化されている。事務局は、会長の勤務校内に置かれている。

なお、役員は小・中・高別及び県教育委員会・学識経験者等から選出され、会長、副会長、理事長、理事、事務局長、主事をもって構成されている。

2. 活動状況

主な事業としては、理事会、全国研究大会派遣、県学校体育優良校及び功労者表彰、講演会、県小・中・高等学校研究大会等を実施している。

近年、生涯体育にアプローチするため、小・中・高等学校の一貫した体育指導が今日的課題として、ますます重要性を増している。

したがって、本県学校体育研究連合会も、これらの要請に応えるべく、今後一層の充実発展を期してまいりたいと願っている。

昭和60年度
福岡県学校保健体育研究会活動内容の概要

福岡市立原中学校校長　小金丸　　孝

福岡県学校保健体育研究会活動内容の概要を紹介します。

1. 組　織

福岡県学校保健体育研究会の60年度は、小学校775校、中学校331校、高等学校146校（定時制29校を含む）国公立の保健体育科教師で組織し、役員には会長1名、副会長2名、常任委員13名、幹事3名、監事3名で構成している。なお会長及び事務局は、小学校、中学校、高等学校の輪番制で世話をしている。

2. 昭和60年度の事業

昨年度は常任委員会3回、幹事会1回、監事会1回、九州・全国学校体育研究大会への参加及び県学校保健体育研究大会等であるが、各小・中・高校部会においても研究大会を開催しているので、それぞれの研究大会の内容は下記のとおりです。

(1) 福岡県学校保健体育研究大会
　昨年度は中学校が当番で、福岡市の教育センターにおいて小・中・高各1名の研究発表と講演会

(2) 小学校体育研究大会
　ア　授業研究　　イ　研究協議　　ウ　講演会

(3) 中学校保健体育研究大会及び宿泊研究会
　ア　2名の研究発表と講演による研究大会
　イ　各地区の研究部6名による1泊2日の研究会
　ウ　県下、希望参加による1泊2日の研究会

(4) 高等学校研究大会
　中央から講師を招いて講演会

兵庫大会ご案内

兵庫県教育委員会事務局体育保健課
主任指導主事兼学校体育係長　　炭　本　哲　也

第25回全国学校体育研究大会は、本年度兵庫県で開催いたします。

昨年9月、研究大会実行委員会を発足させるとともに、研究発表校16校も決定し、鋭意研究に取組んでいるところです。

11月は、瀬戸内海の気候は最も安定した時であり、子供達のはつらつとした精一杯の動きと、学習指導の問題点を提供したく存じます。

開催要項は下記のとおりですので、多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。

記　（開催要項要旨）

1. 趣　旨

豊かな心、たくましいからだをもった児童生徒の育成は、学校教育活動全体の中で行われるものであるが、とりわけ学校体育の担うべき役割は大きい。本大会では「学習効果をより高める体育指導はいかにあるべきか」を主題とし、生涯体育・スポーツを目指した体育学習の現状を発表・研究協議する中で、指導者の資質の向上を図る。

2. 期　日

昭和61年11月20日（木）・21日（金）

3. 会　場

(1) 全体会場（第1日目）
　神戸文化ホール
　• 国鉄神戸駅、阪神・阪急・山陽電鉄高速神戸駅北3分
　• 神戸市営地下鉄大倉山駅すぐ

(2) 分科会場（第2日目）16校17分科会

① 幼稚園部会（明石市立大久保幼稚園）
部会主題　いきいきと活動し、友達とひびきあう運動遊びを考える。
② 小学校部会（神戸市立竜が台小学校他5校）
部会主題　楽しい学習を進めるための指導について考える。
③ 中学校部会（尼崎市立常陽中学校他4校）
部会主題　意欲的な学習をめざす個人と集団とのかかわりを踏まえた評価について考える。
④ 高等学校部会（兵庫県立夢野台高等学校他2校）
部会主題　運動の特性にふれる楽しさを体得させるための指導計画を考える。
⑤ 特殊教育諸学校（神戸市立青陽高等養護学校）
部会主題　やる気をおこさせる体育学習について考える。

4. 講　演
「一人一人の力を伸ばす体育の学習指導」
横浜国立大学教授　梅本　二郎先生

5. 日　程

	9・30	10・00	10・30	12・00	13・00	13・30	15・00	15・30	16・30
11月20日（木）		受付	開会式（表彰式）	昼食	アトラクション	講演		都道府県代表者会議	
11月21日（金）	受付	公開授業		昼食	研究発表 研究協議		閉会		

6. 参加及び宿泊等の申込み
(1) 参加費　1人につき4,500円
（紀要・参加者名簿）
紀要の追加申込みは1部3,500円
(2) 昼食代　全体会・分科会場共700円
(3) 宿泊料金　7,000円～10,000円
（税・サ込み　朝食のみ）
(4) 申込み方法　参加申込書記入のうえ参加費を添えて、各都道府県教育委員会へ申込むこと。宿泊・昼食については、近畿日本ツーリストに直接申込むこと。
(5) 申込み締切　昭和61年9月19日（金）厳守

この本をすすめる

「子どもと事故防止」

大石　昭爾　著
昭和58年7月30日
株式会社　ぎょうせい（電話03-268-2141）より発行
定価 1,100円　A5版 99ページ

学体連　常務理事
東京都立砂川高等学校校長　齋　藤　昭　二

新聞・テレビ等で乳幼児や子どもの悲惨な事故の報道があとを絶たず、視聴者をして心を痛めさせている。家事に追われて子どもに目の届かない家庭、また、親の無知や子どもの生活空間の拡がりから来る事故、さらには、子どもをとりまく周囲の大人の無神経等々が、事故を未然に防ぐことができず、事故に至らしめている。

子どもの発達段階と子どもの事故の発生原因は、深い関係がある。そこのところを理解できれば、かなりの事故が防げるものと思う。

本書は、かって起きた乳幼児や子どもの事故を、体系的に豊富にとりまとめ、多角的に分析し、それに対する対策等が書かれ、各関係者に注意を喚起している。

しかも絵入りで図解し、見易く読み易く、また理解し易く書かれている。「転ばぬ先の杖」として、子どもを持つ親、また、これから子どもをもつ方々、さらには自治体の関係機関の方々にも、是非必読の書として強くお奨め致します。

なお著者は、サンケイ新聞社編集センターの記者で、財団法人　日本学校体育研究連合会の会長である大石三四郎先生の令息である。

ガンバレ体育の先生

マルヒロ護謨工業株式会社
学校シューズ担当営業部長　松　阪　　巌

この10年間、学体連の賛助会員あるいは特別賛助会員として、前会長今村先生、及現大石会長の方針に協賛させていただいて居ります。その間、各学校の校長先生・教頭先生ならびに体育の先生方に多数お目にかかりまして、ご指導法、体育実技等も拝見させていただきました。大変なお仕事だと痛感して居ります。

私事で申し訳ありませんが、小生学徒出陣の寸前の繰上げ卒業で大東亜戦争に参加、中支各地を転戦、最前線で何回も死地をさまよいながらも無事帰還出来ました。これは、学生時代を通じ、ひとえに運動部及び体育の先生方の真心のこもったご指導に依るものと常々感謝の念を忘却したことはございません。

齢（ヨワイ）、古稀（コキ）に近づきまして猶、元気で働けますのも、当時の諸先輩及先生方の不断の訓練等が基礎になり、健康が保持出来ているものと信じて居ります。

生涯体育の基礎づくり及健康保持の指導者として、ガンバって下さい。

色々むづかしい問題もございますでしょうが、我々も及ばずながら学生生徒の足の健康を守り、運動意欲の促進と云う方面からお手伝いさせていただきます。

事務局だより

事務局長　重　田　　一

1. 大石会長　国研を去る
学体連第5代会長　大石三四郎先生は、昭和54年から、国立特殊教育総合研究所長として独特の閃きで研究所の充実・発展に尽力されたが、本年3月31日付で退官され、退官と同時に、次の立場で一層多忙な生活をされている。
勿論、学体連の会長は続けられる。
学校法人　佐藤（さとえ）栄学園短期大学創設準備室長（学長予定）
特殊法人　日本体育・学校健康センター非常勤理事
2. 学体連主催の行事について
昭和61年度 財団法人　日本学校体育研究連合会主催行事をまとめると、次頁の表のようになる。
3. 都道府県学体連の事務局について
学体連事務局から都道府県学体連（会の名称は色色あるが）に差上げる文書は、個々の特別のもの以外に次のようなものがある。
表彰関係、加盟団体会長・評議員報告、研究大会等報告、分担金納入のお願い・補助金使途報告、講習会・研修会要項配布依頼、「学校体育研究」配布依頼。これらはいずれも大変大切なものばかり、特に表彰文書などは、万一の場合は取りかえしがつかない。そこで、事務局から、どれはどこに送ったらよいかを伺った。これによって、都道府県の事務局が次のように分類されるところに存在することがはっきりした。
1. 会長のいる学校に事務局がある　15県
2. 県教育委員会保健体育担当課に事務局がある　15県
3. 上の1と2の他に事務局がある　17県
内訳(1) 会長勤務校の他の学校に事務局がある（15県）
(2) 県学校体育協会に事務局がある（1県）
(3) 県高等学校体育連盟に事務局がある（1県）

昭和61年度　財団法人　日本学校体育研究連合会主催行事一覧

	大会名	主題	期日	会場	主な内容	定員	申込先	参加費
①	第6回障害児キャンプ指導者講習会	指導力を高める障害児キャンプの理論と実践	8月19日(火)～21日(木) 2泊3日	東京YMCA山中湖センター 0555-65-7721	講義 • 組織キャンプの沿革 • キャンプのプログラム • グループワークの理論と実際 • 障害児の医学的理解 実習 • 野外炊飯 • キャンプファイヤー • 入浴介助 • ボート	30名	◎申込先 〒151 東京都渋谷区代々木神園町3－1 国立オリンピック記念青少年総合センター内 財団法人　日本学校体育研究連合会 会長　大石三四郎 03-465-3954・7464 ◎会費振込先 ①と②については 第一勧業銀行代々木支店 普通預金口座 №1364078 財団法人　日本学校体育研究連合会 会長　大石三四郎 ③については 富士銀行青山支店 普通預金口座 №1693162 財団法人　日本学校体育研究連合会 会長　大石三四郎	¥16,000
②	第17回全国学校体育実技研修会 幼稚園の部	幼児が自ら進んで取り組む運動や遊びの指導	8月21日(木) 22日(金)	東京都新宿区立 戸塚第二小学校 03-200-4322 ㊋ 03-200-4324 ㊐	講義と研究協議 • 幼児の発達と遊びの教育的意義 実技 • 鬼遊び・集団遊びの • 遊具を用いた運動遊びの • 動きのリズムの……指導法	70名		¥ 4,000
③	第17回全国学校体育実技研修会 小学校の部	学習課題達成の喜びを体得させる体育指導と評価	8月28日(木) 29日(金)	東京都港区立 青南小学校 03-404-8608 同　青山小学校 03-403-5588	• 基本の運動・ゲーム • ボール運動・表現運動 • 器械運動・体操 • 陸上運動	150名		¥ 4,000
④	第25回全国学校体育研究大会	学習効果をより高める体育指導はいかにあるべきか	11月20日(木) 21日(金)	兵庫県神戸市 神戸文化ホール他 078-351-3535	第1日…開会式　表彰 講演 第2日…分科会(17) 幼1、小6、中5、高4、特1		各都道府県教育委員会保健体育課 → 兵庫県教委体育保健課内実行委員会事務局	¥ 4,500

4.　全国学校体育研究大会について

昭和57年の第21回新潟大会の頃から、理事・評議員会で、全国を東・中・西に分けて、順次全国大会を開催して行こうではないかという意見がおこり、満場賛成で経過して来た。これが愈々実行されようとするのが、明年の第26回宮城大会である。

現在、全国大会は次の通りに決定あるいは内定している。

第25回大会　昭和61年11月20日(木)、21日(金)
　兵庫県
第26回大会　昭和62年10月22日(木)、23日(金)
　宮城県
第27回大会　昭和63年度　愛知県
第28回大会　昭和64年度　？
第29回大会　昭和65年度　北海道（内定）

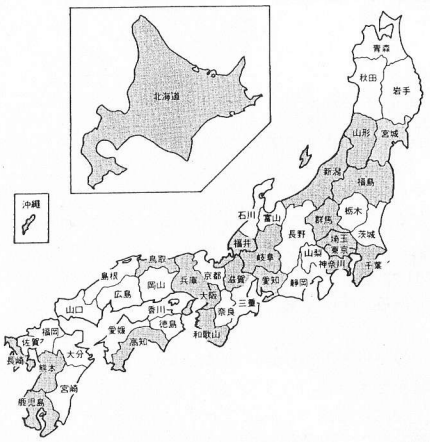
因みに、上の県を含んで、全国大会開催一覧は次のようになる。

なお、東・中・西とは、このように区分している。
東……北海道・東北地区と関東・甲信地区
中……北陸・東海地区と近畿地区
西……中国地区と四国地区と九州地区

全国学校体育研究大会東・中・西部別開催一覧
（昭和65年度まで）

年度	回	東	中	西
昭和37	1	千　葉		
38	2		兵　庫	
39	3			鳥　取
40	4	東　京		
41	5		岐　阜	
42	6		大　阪	
43	7	福　島		
44	8			高　知
45	9			長　崎
46	10	埼　玉		
47	11		福　井	
48	12		和歌山	
49	13	山　形		
50	14	東　京		
51	15		滋　賀	
52	16			熊　本
53	17	群　馬		
54	18	東　京		
55	19	東　京		
56	20		大　阪	
57	21		新　潟	
58	22	神奈川		
59	23			沖　縄
60	24			鹿児島
61	25		兵　庫	
62	26	宮　城		
63	27		愛　知	
64	28			？
65	29	北海道		

全国学校体育研究大会開催一覧（▨は開催県）



5.　表彰について

毎年、全国学校体育研究大会初日の全体会で、その年度の保健体育優良校・功労者の表彰をしている。優良校の表彰は昭和26年度から始まったので、今年は第36回、功労者は昭和46年度からなので第16回ということになる。今年は11月20日(木)神戸文化ホールにおける、第25回全国学校体育研究大会開会式のなかで行われる。

「加盟団体の中から、学校体育の発展に顕著な業績をあげた学校ならびに指導者を表彰し、これからの学校体育の発展に寄与せんと」して、「加盟各都道府県の国・公・私立学校において、学校体育に関する研究と活動が、顕著な成果をあげたと認められる学校及び指導者、ならびに本会の発展に功績があった者」を対象としている。

優良校・功労者の候補として、都道府県推薦委員会が推薦できる数は次のようになっている。

優良校・功労者推薦の数

推薦校数		推薦人員	
東京都	6	東京都	8
北海道	6	北海道	6
神奈川県	5	神奈川県	5
福岡県	5	福岡県	5
福島県	4	福島県	4
埼玉県	4	埼玉県	4
千葉県	4	千葉県	4
新潟県	4	新潟県	4
愛知県	4	愛知県	4
京都府	4	京都府	4
大阪府	4	大阪府	4
兵庫県	4	兵庫県	4
広島県	4	広島県	4
鹿児島県	4	鹿児島県	4
計	62	計	64
上記都道府県以外の県 33	各3	上記都道府県以外の県 33	各3
計	99	計	99
全国大会開催県	1	全国大会開催県	1
合　計	162校	合　計	164校

数字はいずれもその数以内を意味する。

全国大会開催県は、所定の数＋1（優良校も功労者も）とすることは、昨年、昭和60年11月13日の理事会・評議員会で決まった。

昭和61年度優良校候補は131校、功労者候補は153名である。中央審査委員会は7月25日に開かれる。

推薦校数・推薦人員決定に当たっては、都道府県の学校数を2,000校以上と1,000校以上2,000校未満と、1,000校未満の3段階に分け、政令都市の有無を考慮した。〔会報第19号　昭和61年1月15日発行　第13頁参照〕

6.　日本教育シューズ協議会創立10周年

学体連が昭和21年、日本体育指導者連盟として発足し、25年2月23日に財団法人となり、37年10月12日、財団法人日本学校体育研究連合会と改称して今日に至るまで、この命脈を維持して来たのは、大谷武一、東　俊郎、栗本義彦、今村嘉雄、大石三四郎と、5代に及ぶ会長さん方をはじめ、時の理事長さんと多くの懸命な当事者の先生方のご努力のおかげであるが、一方財政豊かならざる会を支えて下さったのは、都道府県の分担金の他、賛助会員、終身賛助会員、特別賛助会員である。特に特別賛助会員と称される、多額の賛助会費を納めて来て下さった方々である。方々といっても、それは個人でなく、会社あるいは団体なのである。この日本教育シューズ協議会（黒田浩平理事長）は、特別賛助会員の筆頭なのである。

昭和61年6月29日（日）午後3時30分より、日本教育シューズ協議会創立10周年記念式典。場所は岡山プラザホテル。

広島の藤井義久さんの司会で、先ず物故会員に黙禱のあと、理事長から来賓並びに参加者の紹介。（敬称略す）

祝辞を述べる大石会長

（財）日本学校体育研究連合会　会長	大石三四郎
全国中学校体育連盟　副会長	栗原　武仁
筑波大学体育科学系　教授　医博	江口　篤寿
関東地区高等学校保健体育研究会会長	齋藤　昭二
（代理　学体連事務局長）	重田　一
近畿地区高等学校保健体育研究会会長	長野　元泰
福岡県中学校体育連盟　会長	小金丸　孝
岡山県高等学校体育連盟　会長	槙野　昭輝
岡山県小学校体育連盟　会長	井上　敏夫

来賓・参加者全体で百数十名。参加者はそれぞれ紹介されると元気よく返事をして起立、夫人も皆起立。どなたも大事にされているムード、誠によい。

黒田理事長挨拶、日進ゴムの渡辺昌平社長の「教育シューズとゴム履物業界」の回顧。

上の順で来賓の祝辞。それぞれの先生が、特色を生かした祝辞、流石である。江口先生が引用したWHOのことば――健かに育ち、健かに老い、厳かに死ぬ――……いいことばだ！いつまでも記憶に残る。

このあと、所謂式典では見られないバラエティーに富んだ新機軸が出て来た。

教育シューズと妻と私。沖縄の仲吉さん、岩手の太田さん、宮崎の田口さん。この仕事を始めてからの奥さんのご苦労をねぎらい、感謝することばが次々と出て来て、聞いている方も感激。これからも是非かくあれと願う。創立活動では北信越の小間井さんと四国の弓立さん、研究開発で佐賀の吉田さん、岐阜の海老名さん、広報活動で新潟の築井さんに山口の宮本さん、特別企画では筑波の花山さんが感謝状と記念品を受けた。

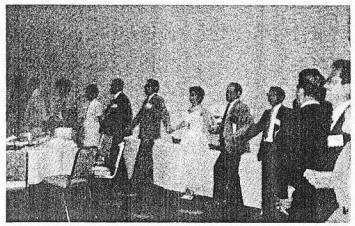
感謝状をうける黒田浩平理事長夫妻

打ち出の小槌の胴体のような形の中に、ＪＥＳと入れた日本教育シューズ協議会のバッチが、弓立さんの創案によって発表されたあと、参加の夫人方に洩れなく記念品の贈呈……美しい場面であった。このあと、黒田理事長夫妻に感謝状の贈呈。10年の苦楽がこの一瞬に凝集したようである。続いて理事長の謝辞。式典終了午後5時30分。計画通りに始まり、予定通りに終る。

祝宴、華やかな雰囲気で6時、日進ゴム株式会社の小松原　進　営業部長の司会で始まる。理事長の簡明な挨拶のあと乾杯。音頭は中国染工株式会社　森本三郎取締役会長。間もなく「鬼面太鼓」の余興。次第に空気が高揚して、祝宴のムードになる。話す声、笑う声、こだまして賑か。

仮面のピエロ　山口県の宮本靖彦さん

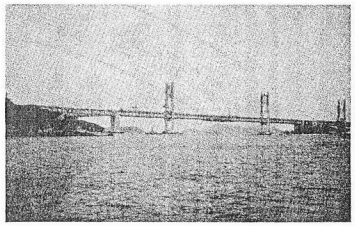
いつの間にかピエロがあらわれ、円卓の間を歩きまわり、走りまわり、そして跳びまわる。誰だ、あれは？ 分らない。 上手に動く。「さあみんな仲よく、おててつないで……」ピエロの合図に、全員素直に立って手を繋ぐ。お手々つないで、野道を行けば、みんな川へ小鳥になって……。楽しそうなこの姿！ 10周年、よかったなあの思いが、皆の頭をかすめる。「ばんざいをお願い致します」司会者のことばは、これで終りを告げるかのようだ。「ここにおいでの皆様、おひとりお一人の健康もご発展も、教育シューズ万歳のことばの中に入れさせていただきます。ご唱和下さい。……日本教育シューズ協議会ばんざーい、ばんざーい、ばんざーい」



踊る会員

関東の行田勝薫さんの閉会の辞で、全く終った。皆さん、ほーっと満足の吐息を漏らしながら、シャンデリヤ輝く会場をあとにした。

観　光　　6月30日（月）午前9時、岡山プラザホテル発。先ず行く先は鷲羽山。海抜133ｍ。50分位でバスはとまる。展望台に。瀬戸の大橋が素晴しい偉容と変化を見せて工事中。梅雨だというのに快晴！　人の誠を神が感応し給うたのか。眺望絶佳。



建造中の瀬戸大橋

下津井港から小船で瀬戸大橋巡行。人力の粋を集めて建造されている大橋の景観、次々に変化する橋、橋。塔の高さ197ｍというのもある。正に人間の築く文化の先端を行く。感慨一入の1時間。鷲羽山パークセンターで昼食後、倉敷美観地区へ。月曜休館が多く、こんなに静かな倉敷は初めて。川の両側の家がよく整備されている。午後3時30分岡山駅着。見事な観光計画、時間配分、時間を厳守してバスの遅発をさせなかった乗客、絶好の天気、すべてが重なった有難い観光であった。

写真はすべて、大石会長撮影によるものです。

――編　集　後　記――

学体連幹事・編集委員長
筑波大学附属盲学校教諭　伊　藤　忠　一

日常の教育活動の繁忙さに追われて、森林にはいりこんだ狩人のように、山全体をみることをつい忘れてしまい勝ちです。教師になりたての頃、今考えればなんでもないことに悩んだり、困難を感じたりしたのも、指導技術の未熟さもさることながら、山全体をみる余裕のなさが大きく影響していたように思います。現在のような情報化社会に生活する私たちは、絶えず高度な選択を求められております。

主体的な学習活動を児童・生徒に求めている限り、私たちも体育・スポーツを核とした多くの課題に主体性をもって対応していくことが求められると思います。授業を中心とした実践的研究をすすめていくことも、その一つだと思います。

20号では、“今学校体育で何が必要か”を問いかけてもらいました。解決策ではありません。これをきっかけとして、学校体育について改めて考えていただきたいというのが、編集委員会のねがいです。

何を今更と思われるでしょうが、時には山全体を眺めることも無駄ではないと思います。

兵庫大会の準備も着々とすすんでおります。次回宮城でも2年がかりの準備に取り組んでおります。

辻野先生から、日本スポーツ教育学会、第6回大会に日本学校体育研究連合会からも実践研究を持って、多数参加して欲しいという呼びかけがありました。学体連の組織として、取り組む最初の試みです。

大石会長も情報化社会に体育・スポーツがその存在を問うには、枠のなかに閉じこもっていては駄目だ、枠をとびこす勇気と叡知が必要だと話しております。長期休業中のクラブ活動の指導、講習会での自己研修と、暑さの夏を元気一杯におすごし下さい。

歓　迎

昭和61年度
第25回 全国学校体育研究大会

期　日　昭和61年11月20日(木)21日(金)
開催地　神戸市（神戸文化ホール）

このたびは「風見鶏」と「国際観光港」神戸に研究大会をお迎えすることになり、心より歓迎を申し上げます。
大会を実施するにあたり、私ども近畿日本ツーリスト㈱神戸ユース支店が大会に参加される皆様方の宿泊・輸送・食事・教育視察のお世話をさせていただくことになりました。
社員一同万全の注意を払い、大会参加の皆様方にご満足いただけるよう頑張る所存でございます。

～教育視察のご案内～

「みなと神戸の旅情満喫」・「急流うずまく鳴門と瀬戸内海」

「紅葉の六甲ドライブと名泉有馬」・「古都京都・比えい山ドライブと琵琶湖めぐり」

とコースに海・山・湖などの多彩な旅の情緒をとり入れております。

多数のご参加を心よりお待ち申し上げます。

近畿日本ツーリスト ㈱神戸ユーストラベル支店 ☎078-391-2847
神戸市中央区三宮町1-10-1 神戸交通センタービル6F　運輸大臣登録一般旅行業第20号